

## 体育系大学生の友人関係とスポーツマン的自我同一性との 関連性について

粟 木 一 博

Relationship between Friendship and athletes' identity among students in sports science college.

AWAKI Kazuhiro

This study examined the characteristics of friendship among students in a sports science college. Using cluster analysis, three clusters were obtained : student who take active relationships with their friends(Cluster 1); students who were worried about hurting their friends(Cluster 2); students who deny active friendships(Cluster 3). Students of Cluster2 showed higher scores in athletes' identity scales than those of Cluster1 and 3 about.

Key words : friendship, sports science college students, athletes' identity

### 研究目的

岡田 (1995) は青年期における友人関係の特徴として、友人に気を使いながら関わる傾向の「気遣い」、深い関わりを避けて互いの領域を侵さない「ふれあい回避」および集団で表面的な面白さを指向する「群れ」を上げている。これに対し、粟木 (1997) は体育系大学に所属し、日ごろからスポーツ活動に従事している学生の友人関係の特徴を調査している。その因子分析の結果、岡田 (1993,1995) によって得られた「躁的防衛」因子、「ふれあい回避」因子とともに体育系大学学生の特徴として「積極的交友」因子を報告している。これらの因子をもとに、クラスタ分析による群の抽出を行った結果、「積極的交友」因子の合成得点が高い群が抽出されると同時に、「積極的交友」因子の合成得点が低く現れる、いわば「積極的交友」に対して否定的な傾向を示す群を抽出している。これらは体育系大学学生の特徴を最も顕著に表していることになるが、友人関係に対する

この積極的、否定的な二つの側面が何に起因しているのかを明らかにすることはできなかった。

また、粟木 (1997) において用いられた友人関係に関する尺度では友人に関する自由記述文章から、岡田 (1995) の友人関係尺度に新たな5項目を付加し、分析が行われた。しかし、これは、体育系大学生の友人関係の特徴を調査するために必要な手続きであると同時に「スポーツ活動を実践する者の日常生活における友人関係」と「スポーツ場面における友人関係」それぞれが曖昧なままにその特徴を論じてしまうという問題点を孕んでいる。

そこで本研究では、「スポーツ活動を実践する者の日常生活における友人関係」に焦点を当てるという意味から岡田 (1995) の作成した友人関係尺度そのものを調査に使用してその特徴を明らかにすることを目的とした。もし、日常生活におけるスポーツ活動の実践が友人関係に関する様々な態度に影響を及ぼしていると考えられるならば、岡田 (1995) の尺度においても粟木 (1997) と同様な分析結果が得られるも

のと考えられる。

また、粟木（1997）は、日常の中でスポーツ活動に深く自己投入を行っている体育系大学生の特徴の一側面として、教科書的な友人関係の受け入れが一般大学生とは異なる友人関係に対するきわめて肯定的な認知に結びついている可能性があることを指摘している。さらに大学生活におけるスポーツを通じた様々な経験がこの肯定的な認知に対して影響を及ぼすことによって、「肯定的交友関係群」と肯定的な友人関係に対して否定的な反応を示す「否定的交友関係群」という二つの特徴的な群を抽出する結果に結びついているのではないかと論じている。本研究では、この時期の社会的・心理的発達課題である自我同一性の形成に対して、スポーツ活動の与える影響は大きいという様々な報告（高田，1985.，岸，1987.，鈴木，1985）がなされていることから、先述した体育系大学生の友人関係に対する認知構造の特徴をさらに明ら

かにするためにスポーツマン的自我同一性との関連性を高見（1990）によって作成されたスポーツマン的同一性尺度（Sports-man Identity Scale：以下 SIS と略す）を用いて明らかにすることを目的とした。

## 研究方法

### 1. 調査時期および調査対象

2004年11月、仙台大学の体育学科学生201名（男子133名、女子66名、不明2名）を対象にアンケート調査を行った。調査対象者の学年は1年生10名、2年生163名、3年生16名、4年生10名であった。この中で回答に不備のあるものを除き、191名を分析の対象とした。

### 2. 尺度

(a) 友人関係尺度：岡田（1993）で見出された友人関係の3特徴に関する22項目のうち、

表1 友人関係尺度の因子分析表

項目番号	質 問 項 目	成 分			共通性
		F1	F2	F3	
13	冗談を言って相手を笑わせる	<b>0.847</b>	-0.140	0.044	0.701
14	ウケるようなことをよくする	<b>0.771</b>	-0.154	-0.067	0.661
15	みんなで一緒にいることが多い	<b>0.764</b>	-0.024	0.068	0.234
12	心を打ち明ける	<b>0.684</b>	-0.134	0.204	0.431
16	楽しい雰囲気になるように気をつかう	<b>0.595</b>	0.001	0.291	0.442
11	真剣な議論をすることがある	<b>0.542</b>	-0.046	0.256	0.171
17	一人の友達と特別親しくするよりはグループで仲良くする	<b>0.511</b>	0.106	-0.221	0.675
8	お互いの領域にふみこまない	-0.172	<b>0.809</b>	0.089	0.692
7	お互いのプライバシーには入らない	-0.143	<b>0.809</b>	-0.018	0.303
10	相手の言うことに口をはさまない	-0.072	<b>0.575</b>	0.081	0.342
9	相手に甘えすぎない	0.196	<b>0.510</b>	0.066	0.361
4	お互いの約束は決してやぶらない	0.340	<b>0.407</b>	0.388	0.527
6	友達グループのためにならないことは決してしない	-0.190	0.355	-0.096	0.739
2	互いに傷つけないように気をつかう	0.129	0.084	<b>0.799</b>	0.622
1	相手の考えていることに気をつかう	0.373	0.067	<b>0.747</b>	0.589
5	友達グループのメンバーからどう見られているか気になる	-0.195	-0.178	<b>0.610</b>	0.439
3	自分を犠牲にしても相手につくす	0.064	0.257	<b>0.405</b>	0.321
寄与		3.714	2.375	2.162	
全分散に対する寄与率 (%)		21.846	13.971	12.716	
累積寄与率 (%)		21.846	35.817	48.533	

岡田 (1995) において分析から除外された 5 項目を除いた 17 項目を評定尺度化したもの。

(b) スポーツマン的同一性尺度 (SIS) : 高見ら (1990) によって作成されたもので、49 項目で構成されている。この尺度には自己感覚、独自性、自己受容、对人的役割期待、安定性、目的志向性、対人関係の 7 つの自我同一性の下位概念をもとにスポーツ領域に合致するように尺度化されたものである。「よくあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの 5 段階での回答が求められた。

## 結 果

### 1. 友人関係尺度の因子分析

友人関係に対する認知構造を因子分析モデルによって検討した。SMC を共通性の推定値とした主因子法により因子分析を実施した。スクリーテストを実施し、3 因子を有意な因子として採用した。さらにそれぞれについて基準バリマックス解を求めた。その結果得られた因子負荷行列を表 1 に示した。便宜的に因子負荷量の絶対値が 0.4 以上を示す因子を今後の考慮の対象とし、表中には絶対値順にソートし、0.4 以上の因子負荷量のみを示した。

第 1 因子は「冗談を言って相手を笑わせる」、「ウケるようなことをよくする」など岡田

(1995) において「群れ」因子と解釈された項目が多く抽出された。しかし、この因子の中には「心を打ち明ける」、「真剣な議論をすることがある」といった岡田 (1995) において「ふれあい回避」因子の中に反転項目として位置づけられた項目が抽出された。さらにこれらの項目は正の因子負荷量を示しており、反転項目として解釈されない。したがって、この因子は、友人と面白さを志向しつつ関わり合う項目とこれが決して表面的なものではなく、この関係を積極的に深めようとする傾向を示す項目とが並存していることになる。これは、粟木 (1997) においてこの調査対象の特徴として捉えられた「積極的交友」に関する因子であると解釈できる。

第 2 因子は「お互いのプライバシーには入らない」、「お互いの領域にふみこまない」といった項目によって構成されている。これは岡田 (1995) による「ふれあい回避」因子とほとんど同様の構成を示していることから「ふれあい回避」因子と解釈することができる。

第 3 因子は「互いに傷つけないように気をつかう」、「相手の考えていることに気をつかう」といった項目によって構成されている。これは岡田 (1995) による「気遣い」因子とほぼ同様の構成を示していることから「気遣い」因子と解釈することができる。

### 2. 群の抽出

表 2 各クラスターおよび因子得点による分散分析表

	平方和	自由度	平均平方	F 値	p
総和	191.24	572			
被験者間	79.20	190			
群	43.43	2	21.72	114.15	< 0.001
誤差 (被験者間)	35.77	188	0.19		
被験者内	112.04	382			
因子	3.80	2	1.90	8.96	< 0.001
因子×群	28.61	4	7.15	33.78	< 0.001
誤差 (被験者内)	79.63	376	0.21		

次に、友人関係尺度各因子の合成得点を変量としたウォード法によるクラスタ分析を行い回答者を分類したところ3つのクラスタが得られた。次に各クラスタおよび因子の合成得点の差を二元配置分散分析(内一要因は被験者内要因)によって比較した。

その結果、表2に見られるように、 $F=33.78$

( $df=4/376, p<.001$ ) で有意な交互作用が見られた。次に、各クラスタにおける因子の合成得点の差と各因子におけるクラスタ間の差について多重比較を行った。その結果を示したものが表3である。

まず、各クラスタにおける因子得点の差についての分析を実施した。第1クラスタでは「積

表3 各クラスターにおける友人関係尺度の因子得点と分散分析結果

	N	F1 積極的交友	F2 ふれあい回避	F3 気遣い	多重比較 (因子得点)
第1クラスタ (G1)	95	3.03	2.54	2.69	F1>F2, F3
第2クラスタ (G2)	78	3.01	3.01	3.40	F3>F1, F2
第3クラスタ (G3)	18	1.58	2.74	2.36	F2, F3>F1
多重比較 (クラスタ)		G1,G2 > G3	G2 > G1,G3	G2 > G1 > G3	

表4 各群におけるSIS得点(上段: 評定平均値、下段: 標準偏差)の比較

	自己感覚	独自性	自己受容	対人的役割期待	安定性	目的指向性	対人関係
G1 積極的交友	3.607	3.645	3.530	3.284	3.174	3.470	3.816
	0.671	0.572	0.634	0.577	0.545	0.614	0.609
G2 気遣い	3.942	3.817	3.855	3.496	3.431	3.612	4.095
	0.767	0.528	0.600	0.600	0.565	0.633	0.967
G3 積極的交友否定	3.127	3.159	3.095	2.984	2.968	3.024	3.310
	1.014	0.814	0.883	0.788	0.798	0.747	1.027
分散比	9.884	9.358	11.670	5.904	6.474	6.251	7.295
多重比較	G2>G1>G3	G1, G2>G3	G2>G1>G3	G2>G3	G2>G1, G3	G1, G2>G3	G1, G2>G3

\*\*\*:  $p<.001$ , \*\*:  $p<.01$

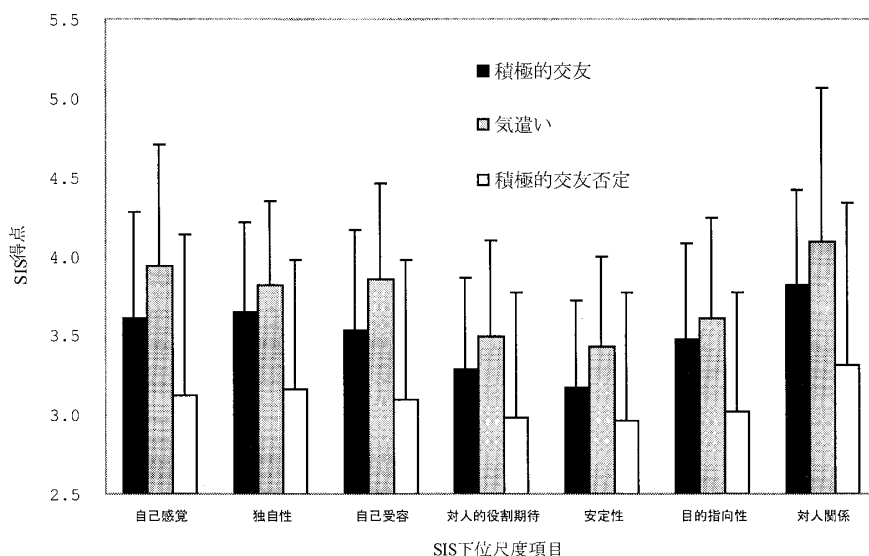


図1 各群におけるSIS得点の比較

「積極的交友」因子が他の因子に比べ有意に高い値を示した。第2クラスでは、「気遣い」因子が他の因子に比べ有意に高い値を示した。第3クラスでは、「積極的交友」因子が他の2因子に比べ有意に低い値を示していることがわかった。このことから第1クラスは積極的な交友関係をとるクラスと考えられ「積極的交友」群と命名した。同様に第2クラスは「気遣い関係」群と命名することができる。第3クラスは「積極的交友」因子に対して否定的な反応を示すクラスと考えることができる。「積極的交友関係否定」群と命名した。

次に各因子における各クラス間の差についての分析を行った。「積極的交友」因子の得点は第3クラスが他の2つのクラスと比較して有意に低い値を示した。「ふれあい回避」因子では、第2クラスが他の2つのクラスと比較して有意に高い値を示した。「気遣い」因子においては、第2クラスが最も高く、次に第1クラス、最も低い値を示したのが第3クラスであった。

### 3. 各群のSIS得点の比較

各群のSISの下位尺度得点を一元配置の分散分析によって比較した結果を図1と表4に示した。

この結果、いずれの下位尺度においても「積極的交友関係否定」群は「気遣い関係」群と比較して有意に低い得点を示した。「独自性」、「目的指向性」「対人関係」の各下位尺度においては「積極的交友」群が「気遣い関係」群と同様に「積極的交友関係否定」群よりも有意に高い得点を示した。さらに、「自己感覚」、「自己受容」尺度では「気遣い関係」群が「積極的交友」群よりも有意に高い得点を示した。「対人役割」、「安定性」においては「積極的交友」群と「積極的交友関係否定」群との間に有意な差は見出されなかった。

## 考 察

岡田(1995)によって作成された、友人関係尺度を用いて体育系大学に所属する学生の友人関係に対する認知構造を調査したところ、岡田(1995)と同様に友人に気を使いながら関わる「気遣い」因子とお互いの深い係わり合いを避ける「ふれあい回避」因子が抽出された。一方、この研究で抽出された集団で表面的な面白さを志向する「群れ」因子に「真剣に議論する」など積極的な関わりを志向する項目が組み合わさった「積極的交友」因子が抽出された。これは、粟木(1997)と同様、日常生活においてスポーツ活動を実践している青年期の友人関係の特徴と位置づけることができる。一般大学生とは異なる体育系大学生の因子構造の特徴は従来、経験的に認められている、外交的、社交的、協調性に富むといったスポーツマン的性格傾向に照らし合わせても首肯できるところである。

しかし、この因子得点をもとに行ったクラスター分析では、体育系大学生の特長であろうと考えられる「積極的交友」因子の得点が低い「積極的交友関係否定」群が見出された。これは、日常的に行われているスポーツ活動の経験やその質が影響を及ぼしているものと推察される。つまり、スポーツ活動は決して青年期における友人関係の認知に対して一方向の影響を及ぼしているわけではないということを示している。この結果に対してSISによる各群の比較からこの点について解釈を加える。「積極的交友関係否定」群が「積極的交友関係」群と比較して有意に低い得点を示した下位尺度は「独自性」、「目的指向性」「対人関係」であった。「独自性」とは「私は自分の種目に対する考えを明確に持っている」、「上達する為に自分で工夫して練習している」などの質問項目により構成されている尺度である。「目的指向性」とは「私は自分の競技に対する目標に向かって前進している」、「機会があっても私はよい指導者になれないだろう」(反転項目)、「勝敗の持つ意味は人により

異なる」などによって構成されている尺度である。さらに、「対人関係」は「競技を通してよい友人を持っている」、「先生(コーチ)は自分のことを理解してくれている」などの質問項目によって構成されている尺度である。これらの項目をモザイク的に組み合わせると強固な勝利至上主義的な指導を受け、自主的にスポーツへ関わる態度を育成させることに失敗し、自己のスポーツに対する関わり方を見失ってしまっているという「積極的交友関係否定」群の特徴を推察することができる。「自己感覚」、「自己受容」、「安定性」などにおいては「積極的交友関係」群よりも「気遣い関係」群の得点が高かった。「気遣い関係」群は岡田(1995)の報告において自己に関心が向き、現実自己像と理想自己像との間に強い相関が見られることから青年期の特徴をよく表す群とされている。これに対して、「積極的交友」群は岡田(1995)の報告において「群れ」因子に含まれる質問項目と友人関係に対する積極的な態度を表す質問項目とが混在している。また、分散分析の結果から「気遣い関係」群はすべての因子得点が他の群よりも高い得点を示している(ただし、「積極的交友」因子に関しては「積極的交友関係」群との間に有意差はない)。これは、この群が積極的な交友関係に関する認知構造を内包しつつ、さらに、様々な対処行動や人間関係の構築に関する技能を身につけている結果であると推察することも可能である。このことから「気遣い関係」群は「積極的交友関係」群と比較して自己定義が進んでいる群であると考えることができる。このことは、本研究における「積極的交友」群の友人関係に対する認知構造が内面的な深まりを帯びたものであるのかあるいは一般的に提示された友人関係に対する価値観を無批判に持ち続けた結果なのかという疑問を新たに提起することになり、これは今後の課題としたい。

## 要 約

スポーツ活動に深い関わりを持つ大学生の友人関係の特徴を明らかにすることを目的として質問紙調査を実施した。友人関係に関する尺度得点をもとにクラスター分析を行った結果、友人関係に積極的な態度を示す群、友人に対して気遣う群、積極的な交友関係に否定的な態度を示す群の3群が得られた。スポーツマン的自我同一性尺度の得点において友人に対して気遣う群の得点が他の2群と比較して最も高い値を示した。

## 参考文献

- 1) 粟木一博, 体育系大学における学生の友人関係の特徴, 東北体育学研究, 15-1, 1-6, 1997,
- 2) 岸 順治・高見和至・中込四郎, 自我同一性形成における運動選手としての同一性感の役割, スポーツ心理学研究, 14-1, 36-41, 1987
- 3) 岡田 努, 現代青年の友人関係に関する考察, 青年心理学研究, 5, 43-55, 1993
- 4) 岡田 努, 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察, 教育心理学研究, 43, 354-363, 1995
- 5) 鈴木 壮・中込四郎, 運動選手の自我同一性の探求とスポーツ経験, 岐阜大学教育学部研究報告(自然科学), 9, 89-98, 1985
- 6) 高田知恵子・丹野義彦・高田利武, 青年期の自尊感情と部活動に対する認知との関連, 群馬大学医療技術短期大学紀要, 6, 29-35, 1985
- 7) 高見和至・岸 順治・中込四郎, 青年期のスポーツ経験と自我同一性形成の諸相, 体育学研究, 35-1, 29-39, 1990

(平成17年7月19日受付, 平成17年7月20日受理)